



エコトピア・レポート  
*Ecotopia*(1975) ア  
ネスト・カレンバ  
(小尾美佐訳) 東京  
元社(文庫) (7/  
刊・¥300)

一九八〇年に、アメリカから分離独立したエコトピア。その後二十年間、国交を断絶したままの西海岸のエコトピアに、一人の新聞記者が訪れる。この国では、一体何が起っているのか、人々の生活は、経済は？——本書は、エコトピアの風俗・社会を報告する、アメリカ人記者ウェストンの記事と日記で綴られている。

文字通り、エコロジーを国是とする国である。著者カレンバックの思想を書きしるしたものだけに(国家として成立しうるのかどうかはともかく)、けっこうしつかりした骨格がある。ちよつと説明過剰きみだが、それも、物語の性格からいって、やむを得まい。何より、一応の「小説」としてまとまっている点がいい。この類の本には、退屈な演説が多いのだから。しかし、本書のユートピアはいかにもアメリカらしい。西海岸、緑と太陽に溢れる土地であるが故に、想定できたユートピアなのだ。著者も、承知の上で書いているが、他では、アジアでもヨーロッパでも、エコトピアは非現実的にすぎる。この天真爛漫さが、良くも悪しくも、アメリカのもう一つの理想なのだろう。